こしやの光

無対の巻

理性の主観……一
法蔵因位……八
無対光……九
三身一体……一四
三法に約して絶対真心態を釈す……一五
衆生法……一九
絶対円融無碍……二一
心境円融無碍……二二
法報二身……二四

理性の主観

個人の頭に阿彌の使命たる理性の一切の行爲を照鑑する知あり之を正知見と云ふ。その衝動より一切の義務行動をする勢力　之が正義　即ち正知見の義務なり。この正義即ち良心は無上道に向ふべき過程の中に　自己の三業に於て善惡邪正を判決して如實に判決をなす。無上權威の神聖態は無規定に行はるゝ道德秩序の中に於て　正義としては良心は憚なく　惡を破棄して善を賞す。

其の正義を顯はさんが爲に　大經に事相に約して　法藏の大願に攝取選擇と天人の善惡に惡を捨て善を選びとるべき願力を示されたり

理に約して釋せば　法身如來藏性の所顯の一切衆生の精神に於て　邪と惡とを破棄し　正と善とを攝取すべきの理あり。斯の如きの理性は一切衆生の精神自然の理性なり。

阿彌の正義一切の主觀に脱却せざるべからざる惡質をば悉く放捨して一切の善を選擇して攝取する。斯の如くの正義にあらざるよりは　主觀界の正義顯彰するによしなし。何に依てか阿彌の目的を彰すことを得ん。佛教善因善果惡因惡果の理に於て善に福を得惡には苦報あり。是また有爲の報を望む如きは　主我幸福主義にして　また阿彌關せざるものなれば論ずるに足らず。阿彌を離れたる者は善惡共に惡なり　主我と幸福主義とは不正義として　排除せざるべからず。

已に阿彌の神聖態の命令の中に　良心が即ち正知見の義務として　思惟し　言語し動作し　精神生活に於ても　阿彌の捨てたる一切の惡を捨て　一切選みたる一切の善を修す。

阿彌無量の大願を以て　惡を棄て善を顯すこと　譬へば寶石を磨きて垢穢を脱却して眞價を顯はすが如し。

吾人是阿彌の個體として　阿彌の終局目的に向つて　彼に達せんと欲す。主我の惡は脱却せざるべからず。

吾人は阿彌の指命の下に正義の旗を立て自己胸中の惡魔との健闘に勝利を望む。たとへ肉を犧牲にしても阿彌の目的に協力せんことを願望す。日々の精神生活の中に於て正知見の判決は審諦にして　善の行爲には滿足を感じ　不善の行爲には良心の罰を免るゝこと能はず。故に善惡の果報として念々に良心の賞罰を受く　最終の判決孰か免るゝを得ん。若し良心の賞罰をさへ感ぜざる如きものは未だ宗教の範圍に入るべきに非ず。導師の眞實心の釋に眞實に一切衆生三業所修解行必須眞實心中作外現賢善內懷虛假貪瞋邪僞奸作百端惡性難止同蛇蝎雜毒之善虛假之行　阿彌陀佛因中行等菩薩行乃至一念一刹那三業所修皆是眞實心中作凡施爲趣求亦皆眞實。

眞實心中側捨自他諸惡及穢國等眞實心中勤修自他凡聖等善　また一心唯信佛語不顧身命決定依行佛遣捨者即捨佛遣行即行佛遣去處即去是名隨順佛教隨順佛意是名隨順佛願是名眞佛弟子。

正義とは知見の義務感情公平なる判決にて自ら判つべし。然るに自己の良心に正當なりと思はざる行爲も阿彌は恩寵をもて赦すと謂ふが如きは正義に非ざるなり。若し是を免さば　阿彌不正の罪佛陀の罪人たるを免れず。內心に於て道德の命令的性あるが故に　神聖態と觀ぜられ　良心の制裁の聲に正義と現はるゝなり。導師の二河白道の淸白道は是純正の正知見正義なり。

大經に智慧無碍にして　虛僞諂曲の心有ることなく　勇猛精進に志願倦ことなく專ら淸白の法を求めて群生を惠利す。

恩寵吾人は本來佛性具有し　本覺眞心あり。絕對阿彌の個體に外ならず。

斯く佛性を賦與せしめて一切を終局目的に歸趣せんとの計畫の理性あるも　罪惡に亡びたる吾人は　自己の力にて解脫すること能はず。然るに阿彌は一切を解脫し靈化せんとして　之を攝取し　自己に協力して活動せしむるは　また終局に歸趣せしむる恩寵なり。

信論に眞如薰習に二義あり。一自體相薰習二に用薰習と。自體相薰習とは　衆生無始來無漏法を具す　備に不思議の業ありて境界の相を作す此二義に依て恒常に薰習す薰習力あるの故に能く衆生をして生死を厭ひ涅槃を樂求せしむ。自ら眞如法ありて發心修行すと

眞如は本一なれども無明等の煩惱ありて差別す。佛法に　有因有緣具足して乃ち成辨を得。木中の火性は是木の正因にして　若し人の知もなく方便を假らずして　能自ら木を燒くこと有ることなし。衆生も爾り正因薰習の力ありと雖も　若し諸佛等の知識に逢て緣とせざれば　自ら煩惱を斷じ涅槃に入ることはり有ることなし。たとへ外緣の力あるも內の淨法の薰習力あらずんばまた解脫すること能はず。若因緣具足する者は諸佛等の爲に慈悲彰護せらるゝが故に。志を發し善を修して涅槃に向ふ。

用薰習とは衆生外緣の力此に無量の義あり　一に差別の緣　二に平等緣差別緣とは諸佛等の知識に依て發心求道し　或は眷屬又は親屬知識等乃至一切の所作無量の行緣

等によりて善根を增長せしめ利益を得る等。平等緣とは　諸佛等皆衆生を度脫せんと欲し　自然に薰習して常恒に捨てず　同體智力を以ての故に見聞に應じて作業を現す所謂衆生三昧に依て平等に佛を見ることを得るが故に。

法界等流　客觀界に流布せる宗敎は一切人類の中に行はるゝ　其內面に實在せる恩寵は　互に相傳ひ展轉して　因緣相係の中に所謂木に火の相展轉して傳ふが如し。相互の刺激益〻宗敎意識を顯して　傳播す。因緣相待て恩寵を傳普化して恩寵を喚起しまた開展し　解脫靈化す。楞伽に說の如く十方國土法報應變化皆從阿彌陀國出。阿彌一切を度せんが爲に　眞より用を起して或は如來因地の發願を示して　大慈悲を發し諸の波羅密を修して　衆生を攝化す等衆生界を度せんが爲に　盡未來際一切衆生を取て自己の如く亦衆生の相を取らず。實に一切衆生も自己も眞如平等にして　別異なきを知るが故に　或は報應二身の果滿の妙色身を現して　無量の相好所住の依報數々の莊嚴を示現して　無邊無碍にして其所應に隨て常に能く住持して毀せず失せず。

十方無量の諸佛等無量の法報應の身を現して　各差別皆分別なく而相妨げざる　此れ心識の能く識る所に非ず眞如自在の用の故に。眞如卽阿彌無碍の妙用なり。圓滿無碍の絕對には因果不二の中に於て或は因分等の身を顯して願を發して盡未來際菩薩の因を捨てず。一方には久遠塵劫已來實成の妙法身を示し悉く隨緣妙用無方住　眞より用を起して　廣く群生を利す　十方法界常恒に斷えず　大悲の故に隨緣す大智を以て妙用とす。

又假名を壞らずして常に度衆生云隨緣了知衆生性空實無度者云妙用　又理卽事故名隨緣　事卽理故名妙用　又眞不虛假故妙用　又依本起末故隨緣攝末歸本故妙用。良以法無方辨起必同時眞理不礙萬差顯應無非一際。

佛眞體を全して以て行體を運ぶ　卽鏡淨水澄擧隨緣而會最善義完之流彩無心而朗十方如明鏡徧形不動而呈萬像故隨緣無方德。

法藏因位

事に約して云へば　本體の妙用を顯示せんが爲に法藏菩薩と現して衆生を度せんが爲に大願を發して　我誓得佛普行此願一切恐懼爲作大安令我作佛國土第一其衆奇妙道場超絶我當に一切を哀愍度脫すべし　假令身を諸の苦毒の中に止むとも　我行は精進にして忍んで終に悔ざらんと。

菩薩の衆生を度せんが爲に　十方一切處等微塵許りも身を捨てざる處なし。無量の大願無限の大行を以て一切を度す。

理に約して釋せば　法身藏性には自己の理性よりの一切衆生を終局に歸趣せんが爲に　衆生の佛性を開展して　理性に隨順して阿彌の中に活動せしむべき理性にして極樂は法性眞如の理性　法藏は法身藏性にして　藏性を開展して無限の光壽を顯示す一切衆生は自己身內の　一切なれば　常に開展して終局目的に向はしむ。

大願とは眞如の勢力にして　一切能と　一切悲と。一切を度脫する勢力を大願といふ。此の如き理あるの故に事によつて度脫せらるゝなり。

無對光　絶對光

阿彌の本體は　絶對無限　一體に無量の義を具備す　法報應三身を統一し　法般解三德を合一し　心佛衆生三無差別の性。

理智不二三大を總ふ

阿彌佛隨機方便には十方諸佛一佛にして　相待的に東に待して西方と云穢土に待して淨土と云　他佛に簡て　阿彌佛と爲　是事に隨ひ　機に隨て說のみ。阿彌の實體は楞伽に所謂十方諸刹土衆生菩薩中所有法報佛及變化皆無量壽極樂中出とは　是深秘の眞理の阿彌の本體絶對精神態にして相待的に非ず。

元來佛教理論には　佛體即ち宗教客體に學語を以て種々の名稱を用ひ　法と佛とを分別して　法は無限の法體として　法體の用に報應の二身を佛とするは起信の如しそは釋尊の應化卽ち人格を佛とする標準より出たる說にして　圓滿の宗教としては本意に非ず。客體を稱するに眞如法性第一義諦如來藏性等其名稱甚だ多し。絶對眞心卽ち大乘佛教の客體の詮表なるに外ならず。絶對の本體を命ずるに種々の名詞あり　楞嚴に如來藏性妙眞如性名詞が本體を詮表するに最も適切なり　種々異名には眞心　自性　眞際　菩提妙性　實相靈智法身等の名　或は毘盧遮那徧一切處等有りて數ふべからず。

今宗教の客體を詮表するに最も完全圓滿に彰はすには　阿彌陀の號を以てするが是最圓滿に發達したる宗教意識の客體とする名稱なり。宗教に阿彌陀と名くと如來藏性妙眞如性とは同體の異名にして　甲は宗教により乙は學語に名づけたるに外ならず。今は宗教の語をもつて阿彌の名を用ふ。起信には眞如と名づく。宗教客體は絶對にして世界一切因果の根底とし　萬物を統攝し　一切の終局の歸趣するの極致にあらざる

よりは　一切の依屬とするに堪へず。

若し客體にして自ら全法界の最終の根底とし歸趣する所にあらずして　自らは相待規定の所謂　依佗起性にして絶對眞如の客體の屬生物として　一佛土を構ひて衆生を濟度すといふが如きは　自ら相待規定を免かれず。絶對に依屬するに非ずや自ら佗に依屬せるものにして佗の依屬となる能はず　そは唯紹介者たるに過ぎず。何ぞ宗教客體とならん。

今宗教客體に要求する處の阿彌は楞伽に所謂　十方佛土乃一切無量の法報應等の一大本源にして　一切法界の最終の實體にして　十方一切の諸佛も一切衆生も國土も一として　之に統攝せられざるものなく　十方法界無數菩薩及衆生等の最終の歸趣する處にして　最圓滿なる宗教客體たり。但し宗教の學說に拘らず單に信仰業事の方法便宜として　事相の客體を立て是に心機開展の必要に出たる如きは今の論ずる處にあらず。理と事とは相待て離れたるに非ず。事相家の宗教によつて　業事成辨するが如きは其の宗教關係の中に理法のある有て　而して事業により成辨するのみ。例ば未だ食物の化學的原理をもわきまへず　消化の理も識らざるものも食すれば　自ら營養作用あるが如し。彼れ自ら識らざるも其理なきに非ざるが如し。

阿彌一體の三義

絶對阿彌の本質は絶對精神態にして無限　所謂　一眞法界法門の體　絶對唯一の本體に三義を具す。曰く　法身般若解脫となり。一體の法身に二德は屬性なり。二德具すれども本法身に屬す。二德具するが故に縱に非ず　法身に屬するが故に横に非ず

一に非ず　異に非ず

絶對精神絶對の故に非空間非時間非物質　また徧時間徧空間徧一切徧活動　一切自中存在本體絶對。

法身と般若と解脫とは不横不竪不一不異法身を擧げば必ず般若と解脫を具せり。本不卽不離の故に三德は一體の三義。法身大にして統べざる處なし般若大にして處として

て照さゞるなく　解脫大にして處として融せざるなく　法身は體にて般若は象　解脫は活動にして　本然の自性　永劫一切に含蓄して　循業隨緣の發現なり。

三身一體

自體相は絶對自性畢竟常恒本自無邊功德を具備す。大智慧光明の義徧照法界の義眞實識知の義等無邊聖德を如來藏亦法身と名く。阿彌卽ち眞如自體相とは從本已來性自滿足處染不垢修治不淨在聖體而も處凡夫不滅　信論に眞如の自體有二　智慧光明義故眞實識知義　知義の故自性淸淨心の故に乃至一切恒沙功德不思義佛法を具足し　滿足して少く所なき義の故に法身如來藏と名く。自然に不思義の業用あつて　眞如に等しく一切處に徧し無作自然　如來唯法身智相第一義諦にして　世諦の境界あることなし施作を離るれども但だ衆生に益を得せしめんが爲に　自ら妙用をなし凡夫二乘に對しては應身を示現し種々の色相を現し菩薩の爲には報身無量の相好依正二報莊嚴を示現して　無窮にして其所應に隨つて現す。如來法身本色相を離れたるも法身是色の體なるが故に能く色を現す　本來色心不二なるが故に法身一切處に徧するが故に　所現の身色も衆生の心に隨ひ　業に循て發現す　眞如自在の用の義なるが故に

眞如是れ阿彌の法身法身一切處に徧して　衆生の見聞に隨つて報應二身及變化身を示現して　能感の機十方所有刹土に能感の機ありて　緣熟する時は一時に示現して遊あることなし　故に十方法報應悉く阿彌より出づ　機に隨ひ用に隨て　三身を發現す本是一なり　絶對眞心なり。

三法に約して絶對眞心態を釋す

心佛衆生是三無差別と　無差別性卽絶對阿彌の性なり。此性迷に在るも滅せず　悟に在るも增さず　性より見れば無差別　用より見れば三而歷然　心法とは阿彌の本質絶對精神分齊なく亦方隅なく　初後なく並に時劫なし横に徧く竪に窮め絶對不可思

義　一切世界因果心に個々體と爲る。心性不可思議衆生と顯現するも心性は不變　心性は不變にして　卽ち十界に隨緣の身心土を顯す。一切の顯動態に在て　而も其性を見ることなし　性德有相に非ず　亦無相に非ず　見るべからず　見べからざるも性なきに非ず　有に非ず無に非ず　一に非ず　異に非ず　四句を絕し百非を非す。

此の心性に迷ふ故に六趣に迷沒す　諸佛は之を證して極果とす。菩薩之を悟入して其因とす　而も心體は因果に非ず　是十界迷悟の本源生死涅槃の本體名づくべからず　强て名けて心法と云ふ。

佛法　絕對阿彌本來迷悟なく　迷悟生佛は是相待の假名生死涅槃何ぞ絕對にあらん本煩惱なし何ぞ菩提あらん絕對阿彌また不可思議に積極の方面に本來阿彌の自中に在て　迷悟生佛生死涅槃の相を發現す。煩惱を轉じて菩提となし生死に卽して涅槃を現ず。茲に於て佛法顯はる佛法無量の義あり　今事理の二義に約して佛法を顯さん。

事に約して阿彌を示さば因あり　果あり　總あり　別あり　絕對本因果なきに因果を示し　因には法藏菩薩の願行を示現して　阿彌の性德の無限の妙用あつて　一切を攝取度脫の性能なることを示す。果には塵沙の相好光明光明遍照法界衆生攝取不捨の妙用あつて常恒に一切を開展し　衆生を度脫する性能なるを表す。是の如く若しは因分　若は果滿の妙相十方法界一切の處に周徧して　衆生の心に隨ひ念に應じて　邊齊あることなし。總とは總じては十方無量の法界に種々の名種々の相好等を以て衆生を攝度す。悉く阿彌三身の所現にして　無量の相好を現したるに外ならず。三世十方名字の不同年記の異種あるも其本體を尅せばあみの所現故に總と云ふ。別とは別にして西方にあみだ佛あり等また三十六　阿彌陀佛在り等大論に同名の無量の阿彌在ることを明す　阿彌の別名悉く絕對阿彌の所現なり。事に約して無量の依正二報の莊嚴等なり。

また大日阿閦阿彌陀寶勝釋迦等の五智等も　悉く絕對阿彌の理智を表明したるに過ぎず　或は華嚴事々無碍法界に毘盧十身互用無碍　或は自身以て衆生身國土身業報身

聲聞身緣覺身菩薩身如來身智身法身虛空身如此の十身隨華身攝餘の身故に入一鏡像觀等も絕對阿彌の事々無碍の妙用のみ。

絕對に因果とし　圓融無碍因該果海　果徹因源　一方には永恒不斷に菩薩の身を現して　度生化物の用を施し。

內面には常恒に重々無盡の蓮華藏界に廬遮那ありて塵沙の相好光明等具さに說べからず。阿彌事々無碍の妙用のみ。理に約して釋せば絕對眞心本自離卽離非是非卽遮照同時不可思議隨緣の故に十界の身心土を現し　不變の故に十界卽絕對眞心不度卽隨緣の故に俱卽なり　隨緣卽不變の故に一切俱非なり　隨緣の故に十界迷悟染淨の諸緣に隨ふ不變の故に十界迷悟染淨の諸法悉く當體一切俱非なるを空の義一切俱卽を不空とす。空と不空と眞心の義のみ。盡十方國土衆生及法報應變化身是阿彌より出づと。一切の句々塵沙の萬有も悉く一理より根底より出て一理に歸趣す　其一理の性卽ち阿彌なり。理を離れて　事相法界あることなし。また事相を離れて理性の妙用を顯はすことなし。約理にせば

法身般若解脫の三法にして　圓妙の三德は理空間を超え時間を絕し縱橫を非す法身大處として統せざるなく　般若大處として照さゞるなく　解脫大處として融せざるなく　三德體の二屬性卽ち阿彌の一切慧一切能に外ならず。諸佛は此理法に軌て已に成佛し　菩薩は此法に軌て當に成佛す。一切衆生は此の理に違ふが故に沈淪す。

衆　生　法（楞嚴の義）

絕對本體本來不變なるも　また染の緣に隨て　九界衆生界も顯現す。含識本有迷悟本性を失はず、衆生は佛の三德に迷ふて三惑と爲す。一惑障見思塵沙無明の惑三菩提を障ふ　二業障善惡不動諸有漏業三解脫を障ふ。三報障同屬分明方便變易の報三涅槃を障ふ　三惑卽三菩提なり　菩提の性を離れて別に惑なきが故に　目を離れて瞪なきが如し。三業卽三解脫なり。解脫の性を離れて別に業なきが故に手を離れて拳なきが

如し。三土生死卽涅槃なり　涅槃の性を離れて生死無が故に空を離れて華なきが如し故に惑卽涅槃業卽解脫苦卽法身又曰生死卽涅槃煩惱卽菩提なり。菩提は是究竟智德菩提と解脫と涅槃とを照す。涅槃は是斷德　三惑を斷じ三業を斷じ三生死を斷ず　菩提は是如智涅槃は如の理理智不二を法身と名く。生滅を妄と名く。妄と滅と〇と名く是如來無上菩提及大涅槃轉依の〇と稱す。喩は水の氷と成が如し。夫水と氷と濕性相同じ。

〇流異れり謂く　九法界は染緣に隨ひ　菩提を轉じて煩惱となし　涅槃を轉じて生死と爲す　喩は水の氷と成が如し　流〇の相と濕性とは失はず　然れども亦幾と辨じ難きが如し　然も濕性は在らずんばあらず　濕性已に在らば則流〇の性亦失はず。に緣より奪て但正因と名く。諸佛は淨緣に隨ひ煩惱を轉じて菩提と爲し　生死を轉じて涅槃と爲喩ば水凍つて氷と成が如し　九界は氷の如く　佛界は水の如し　絕對阿彌の中に染淨隨緣の衆生と及び佛界となり。

衆生法また心法　心外別に衆生有るに非ず。亦佛法　佛法の外に衆生有るに非ず。衆生法の外に佛法有るに非ず。一衆生法に一切衆生法と佛法と心法とを見る。一佛法に一切佛法衆生法を見る　心佛衆生三無差別。卽ち絕對阿彌の三方面一體と三法とは非一非異　絕對阿彌を離れて三法有るに非ず　三法を離れて絕對阿彌に非ず。

絕對圓融無碍

法身の體性華嚴に十種の體性を明す　曰く　法身亦自性身と名く一佛陀論唯所照眞如淸淨法界爲性餘四智並屬報化　二或は約智無性　攝論無量碍智爲法身　三亦智亦境攝論に唯如々智獨存爲法身　四境智雙義如來法身非智非境　七通攝五分及悲願等法行功德皆是此法身ならざるはなし。攝論三十二相等皆入法界身　九通攝一切三世間の故に衆生及器界佛に非なし　故に一大法身具十佛故三身等並に此中に有智正覺に攝するが故に　十總前九爲一總句　是謂如來無碍自在法身の義　今曰絕對阿彌の法身是なり

此法身の業因に四種一此理法身は諸の觀智の爲に開覺せらる　經に法身說法授與義の故に　今曰く一切衆生信機開展せば　衆生含蓄せる法身の業用に外ならず。二此に依て報化を起し　生を利し勝業因を起す故に。三或は〇等に依て密に攝化する故に四に諸塵道無〇等處に遍して　重々自在無碍業用なり　十方一切或は顯動若は本然一切絕對阿彌の業用に非ざるはなし

心境圓融無碍

心境秘密圓融觀　華嚴妄盡還源

心と言は謂く無碍心　諸佛之を證して以て法身と成し境とは謂く無碍境諸佛之を證して以て淨土と成す。如來の法身も所依の淨土も圓融無碍。或は身に刹土を現じ　經に一毛孔中無量刹各有四洲四大海須彌鐵圍亦復然悉現其中無迫隘　或は刹に又佛身を現ず　經に華藏世界所有塵一々塵中佛皆入起神變毘盧遮那法。

阿彌絕對本質は圓融無碍にして　衆生は唯この經驗界のみを見る。絕對無碍の本質の內容には無盡の德を含藏するが故に若し宗敎心理の啓示卽ち三昧に入て觀ずる時は盡空間に　或は佛の無量相好光明普く十方を照すを觀ず。或七寶莊嚴の依界を見。處を轉ぜず　心に隨て種々無量の境界を觀ぜんに無碍なり。物質に無碍圓融を求むべからざるも心理卽ち三昧中には圓融無碍の理あることを證明すべし。

一切の處とし一切の時として　啓示の中の阿彌身心顯現せざるはなし。故に知る阿彌の本質及び無盡の相好等の屬性も等しく一切處に周徧して實在せざることなくその本質に適したる精神の三昧に依て　觀取することを得ると。事理圓融　本質と顯動とは無碍なり。

吾人は經驗の顯動世界中に超天然なる絕對眞心質と無碍にして　天然の心機には感覺的に經驗世界を見ると同時に三昧には阿彌の內容に入て依正二報の妙色莊嚴を觀ずるに無碍なり。

本體本絶對無限なれば　此宇宙の外に佛及淨土を求むべからず。自己の心を轉じて阿彌の內容に入らば　一切處として妙色ならざるなし時として淨土ならざることなきを證せん。佛陀の曰く我三界の如くに三界を見ず。謂は我は世間の人の感覺世界のみを見ずして觀念世界に常に淨土常に寂光を見るなり。また衆生は劫盡て大火に燒かるゝも我此土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸堂閣種々の寶もて莊嚴せり。圓融無碍の華藏世界この經驗界の本質內容に求めずして　何の處にか在らん。幼稚宗教意識天然に佛陀及淨土を求むるの誤を除きて正理に求むる時は必ず觀ずることを得ん。

或は常に寂光土又は華藏世界は絶對あみ內容の多方面なりと識るべし。圓融無碍の身心土に就て絶對たることを說きぬ

法　報　二　身

絶對阿彌の本質理體は本有にして修成にあらず。本然淸淨にして發現して始めて成しに非ず。是諸佛の本地萬法の極致　本然の阿彌は內容には本自常寂光にして同時に妙色莊嚴なり。客體の本體には本有の外に成不成なし。顯動體の世界的方面の相待的因果の規律なる衆生の爲に　暫く客體の阿彌も果成の如來と說けば　隨機の說にして本來客體は本有　また因果規定の相待に非ずして　絶對的の精神態に無盡の妙色莊嚴は衆生の方面より見聞すべきのみ　絶對阿彌は本然の客體　衆生の方面より轉依して寂光全圓滿に解脫靈化したる時は　絶對阿彌內容に實在的に歸入し已んぬ。之を大涅槃亦無上正覺を得と爲　法身とは一切衆生の根底また本體なり。

報身とは　本體より出て佛性具有せる衆生の報身なる終局目的に向ふべき客體の恩寵に依りて　心機發展し天然の主我より絶對阿彌の中に轉依して　眞我の中の我とし阿彌の個體として終局目的に協力して　神的行動し理想的に解脫し　而してこの依身命終て實在的に絶對阿彌の報身に歸入す　報身報土とは一切衆生の終局に歸入すべき內容にして　信仰の因業より其果報として　證入すべき故に報土とす。是また衆生に

對する名目にして　絶對阿彌因果規定の相待物にあらず。絶對自身の阿彌に因果あらんや。報身とは衆生また一切衆生にして　終局目的の光を與へんが爲め　絶對阿彌の不可思議の妙用より發現したる報身なりと爲す。本體相待因果に非ざるも衆生の爲に因果を示し　因には法藏として無限の大願を示し　果には十劫正覺の報身なりと現ず。

是また機に對するの妙用にして　本來本有の法身に自然の妙用なり。天台師の釋によるも　隨機方便の別教にては法身は本有にして　報身は修より成し應身は起用なりと。隨自眞實の圓教にては三身全く是性具亦復全是修より顯現す　性と修と不二なるは圓教の如來なり。實は楞伽に說が如く　一切法報應は阿彌より發現してまた阿彌に歸入す。一切衆生もまた爾り。客體に因と果位とを分ち報身の如來を說けるは隨機の說のみとしるは能く發達したる宗教意識に適すべし。

昭和九年八月二十八日　印刷
昭和九年八月三十日　發行
（誌代年壹　圓）
編輯兼發行人　山崎辨成　小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎　小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所　電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番